

第七回 齋藤茂吉短歌文学賞

小暮政次 『暫紅新集』

短歌新聞社

正賞・茂吉自筆色紙の織画
副賞・賞金百万円

選考委員

委員長 岡井 隆

委員 小市巳世司

富小路禎子

中村 稔

前 登志夫

(五十音順)

小暮政次『暫紅新集』(自選十首)

出でて歩めり季おのづから移れりと日は照り花々咲き蝶とべり

万境に遊ぶべし一心を保つべし易からずとも高く行くべし

天は高く吾を促す朝の光若葉はゆらぎて又静かなり

考へて考へて僅かに到り得しところは此処か万象渾沌

悔しみを共にすべき人々は殆ど亡く季は竹村のなびく秋なり

青芝に跳ねて去る雀は未だ幼し幼き者に眼を凝らすべし

深く吸ひて軽く吐くべしこの一息さへわれの命を運びくるるなり

心棒を引抜いてがたがたになつてゐるこの気安さを人々知らざるや

人間を全く知らないからと笑はるるとも笑ひ返す術もなし

光ある方に向ひて目を挙げむさしくる光かすかなりとも

受賞のついで

小暮政次

この度、齋藤茂吉先生ゆかりの、短歌文学賞を、私の暫紅新集が頂くことになりましたことは、まことに、心の底からのよろこびとするところでございます。厚く厚く御礼申し上げます。

幸ひにも、私は、アララギにおさまして、先生を真近く仰ぎ、先生の踏まれたところを尊しとして、歌を作りつづけてまいりました。老齢になりました、力いよいよ乏しい者ではありますが、老骨を励まして、遣れるところまで遣らなければなりません。この時に今回のことは、強く心の支えとして、うれしく思います。

若い頃から、先生を近々と仰ぐ幸福を得まして、歌のことのみならず、先生のさまざまのお氣持を承はった事も、今は、私の貴重な思い出であります。世界文学の中に、先生の御作をおいて考え、これからも、恩恵にあずかりたいと願っております。

それにつけても、先生を近く仰ぎ、先生からいただいたくさぐさの思いを、今改めて思い返して、感慨ひとしおでございます。有難うございました。



第7回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

小暮政次(こくれまさじ)

歌人。

明治41年2月2日東京生まれ。

大正14年東京府立第一中学校卒業。

昭和2年から55年間三越勤務。

昭和5年に「アララギ」に入会し、現在編集委員。

歌集に『新しき丘』『春望』『花』『春天の樹』『雨色』『薄舌集』『暫紅集』、選集に『青條集』などがある。

日本文芸家協会に所属

感想

岡井 隆

『暫紅新集』は老年彷徨の歌である。

求めよ更に求めよと声は促せど今は
いづ方に心を向くべき

といふ歌がある。年老いてなほ心安がず、東に行き西へ走り、すべてに疑ひを抱き、安心立命しない心境がある。この集の各所に、ひとり言のやうな歌を散らばらせてゐるのは、この心境である。わづかに、

この町に移りてうれし梅あまた幹古
りてなほ花鮮かに

のやうに、自然を見、花に安らぎ、水をたのしむ時がある。しかし、それとて虚無の思ひに打ち消されて行く。

太陽が無ければそれを創るのだ此の
言葉ありてカづけられき

人だけでなく自然や、出遇う事物すべてに作者の温かい心が生きているのである。

文学の人の心やさしさを思ひたり短
歌の人々の心にはあらず

など積極的な批評精神を折々見せられて尚壯年の力を持つ作者に感動した。

寸感

中村 稔

小暮政次という名はアララギのふるい歌人として親しかったので、その歌作について私はある種の先入観をもっていたのだが、『暫紅新集』に接してそうした先入観がこなごなにうち砕かれる思いがした。作者はここで写生をつきぬけ、語法においても、歌境においてもまことに自在無礙な世界を展開している。たとえば平成四年の作に

かういふ歌を読むと、自然の王様である「太陽」でさへ創ってしまったかねない勢ひである。東洋的な老年枯淡の境など望むべくもなく、此の世の現実にとちまはつてゐるこの人の態度に畏敬と親和の思ひを抱くのだ。

新を求めて

小市 巳世司

カ尽して写すともあは虚し虚し蒼悉
く花開くとも
過ぎてゆく影皆淡しその中のひとつ
の影と今は見送る

小暮さんは土屋文明門下にあつて早くから逸材ぶりを發揮した歌人である。写実を根本に据ゑながら、常に新しい方向を追求し続けて来た。戦後早々世に出た第一歌集「新しき丘」から半世紀、次々

万象の変幻の中に活かされて漂ひて
到るべきところは嗚呼
手における盃に照り合ふ光ありこの
夜のみの光にはあらず

といった作がある。作者が人生の晩年の生をこのやうにうたいあげ、うたいおさめたことに、私は写生の真髄をみただであった。

輝くいのちの滓

前 登志夫

竹の林あり老いし鈍りし竹を憎めり
憎むべきものは憎まむ

ただ老いぼれていくのはどうという事もないが、見事な老いはなかなか至難である。すべての価値観が著しく変貌する今の世に、正しい意味で、その老いにふさわしい成熟を遂げるのは稀有なことかもしれない。

と詠風の色合ひを塗り替へて来たのも頷かれる。かうして至り着いたのが今回の「暫紅新集」である。個を越えた普遍へ踏み入らうとしてゐるやうに見える。一頃の華やきは影をひそめたが、独自の韻律が楽しい。

年輪の味と精神の若さ

富小路 禎子

長年作歌しつづけて老境に入った作者がたんと自在に詠み、ゆったりした味わいの一冊である。人生の年輪相應に悟つた趣もあるが、枯れ切るのでなく、中々若々しいエネルギーもみせる。八年間の一七三九首から数首をあげるの難しいが、どの頁を開いてもたつぷり作者の心に触れて親しみを感じる。

岩魚浸しし酒舌にありこの夜は人を
さまざまなつかしみする

小暮政次氏の『暫紅新集』にみられる独特な自在さが魅力である。飄々として無私なる境地に遊ぶ伸びやかさがある。しかも随所に小暮氏の歌論が詠まれているのも面白い。

詩歌以前をただ尊しとある時に月は
明らかに東に高し
歌だけを生命の表れと思ふなけれ歌
は生命の滓に過ぎぬなり

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
第二回 本林 勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
第三回 塚本 邦雄 『黄金律』 花曜社
第四回 前登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
第五回 齋藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院
第六回 近藤 芳美 『希求』 砂子屋書房

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇一七〇

山形市松波二丁目八一―山形県文化環境部文化振興課内
TEL 〇二三六―三〇―二三〇六